2002 年度 修了

ＩＣＵ入室患者における状況的危機回避への介入
―ケアリング行動のためのパフォーマンス・マネージメントの探求―

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域　障害・行動分析クラスター

ICU(intensive care unit）とは，強力かつ集中的な治療・看護によってその効果を期待できる重症患者を対象とするユニットのことをいう。その療養環境は，先進的ではあるが，ICU に入室する患者にとっては非常に侵襲的な環境でもある。中には身体的に危機である上に，心理的にも危機的な状況であるために，いわゆる ICU 症候群（現在ではこの名称は使われていない）と呼ばれる精神障害を引き起し，それらが回復や治療面に重大な影響を引き起こすことがある。日本に ICU が発足されて 30 年が経過しようとしているが，このような現状をふまえて，昨今では ICU 環境の大幅な見直しとして，治療や看護へのコンプライアンスではなく，患者主体の人間性・日常性を確保するケアが重要な課題となっている。そこで本研究の目的として，ICU に入室する患者が状況的危機に至らず回避できる環境設定を探ることとした。つまり医療者側の価値判断で，患者が望むであろう内容を推測し提供するようなものではなく，患者が看護師を弁別刺激とし，要求が言語化されるという患者の行動を成立させやすくするアプローチを考えた。そしてそれを本研究においてノン・コンプライアンスのケアリングと名付けた。ICU のケアリングにおいては，患者が我慢や遠慮が成立する以前に，即時に看護師等に伝える要求言語行動が成立するような状況が重要である。そこでは，いわゆる「自己決定」と呼ばれる社会的関係が可能となるように，看護師は即時的なかつ連続的な対応ができる環境設定をしておかなければならないと考えた。

まず過去の研究から、ノン・コンプライアンスのケアリングを目標とし，患者主体の行動成立が可能となるような，人間性・日常性が確保された状況的危機回避のケアリング行動のガイドラインを作成した。そして本研究の課題を達成するには、このガイドラインに即して ICU 看護スタッフが，一律に，ケアリングが行動として生起することが重要であった。そこでパフォーマンスマネージメントの手法を用い弁別刺激と強化の操作を加えて，看護の質を保持するために従いやすいルールを設定し，看護経験や個人の看護観・価値観などに左右されずにケアリング行動を制御したいと考えた。

よって本研究の意義は，ICU 入室患者に対して状況的危機回避へのケアリング行動のパフォーマンス・マネージメント操作に関わる諸介入を独立変数とし，看護師のケアリング行動の変容を従属変数とした。そして状況的危機回避への介入の効果測定を実証することとした。

対象は総合病院４施設の ICU に勤務している看護師計 101 名．及び心臓・大血管外科手術を受け，対象施設 ICU に入室した患者計 81 名であった。

S1 施設 ICU においては，状況的危機回避へのガイドラインをチェックリスト様式に変更したものを独立変数として介入し，対象患者の ICU 譫妄出現率を従属変数として，群間比較デザインにて検証した。結果，チェックリスト導入後，看護師の状況的危機回避へのケアリング行動は生起し維持されていたが，ICU 譫妄出現患者数は，15.5%から 10%へと減少したものの有意差は認めなかった。

S2・S3・S4 施設 ICU においては，S1 施設同様のチェックリストを使用し，導入前後でのケアリング行動項目ごとの生起率を，結果的には擬似的となったグループ間マルチベースラインデザインにて検証した。結果，ICU ケアリング行動の生起率は，いずれの施設においても増加していたことが確認され，その生起率は高い値で維持されていた。このことから，ICU 環境におけるケアリング場面において，チェックリストの有効性が確認された。使用したチェックリストを展開する際の正の強化は，個人が行動したケアリングに対して，自己評価を行う時点で，客観的かつ即時的にフィードバックすることが可能となったことであると考えられた。そして，これがケアリング行動を高い生起率で維持されるものとして有効であることが分かった。

状況的危機回避へのケアリングガイドラインの有用性の検証として， 全施設 ICU に入室した対象患者に対して，山勢が作成した心理的対処プロセスから導き出された４つの対処モード（行動の抑制・情動的行動・情報収集・問題志向的行為）から構成された行動評価用紙を使用して，ガイドライン導入前後における患者の対処行動を測定した．その目標は，行動の抑制・情動的行動は減少し，情報収集・問題志向的行為は上昇することとした。結果，情動的行動・情報収集・問題志向的行動は変化し，改善されていたことから，ガイドラインの有用性が示唆された。

ICU という Critical な臨床現場で勤務する看護師には，主に救命や重症度の高い患者に対してその専門性が要求され，ハイスキルなケアリングを提供できなければならない。このような現状にあっても看護師は，常に患者主体のケアが提供できることが，看護における大原則である。本研究の結果から，今回 ICU におけるケアリング行動を生起・維持させるには，パフォーマンスマネージメントが有効であることが明らかになった。さらにこの効果を高めるには，看護師ひとりひとりの具体的行動に，正の強化がより確実に与えられるような，パフォーマンスフィードバックの方策を設定していくことが今後の課題である。